

群 教 セ	G15 - 01
	令 7.289集
	高-キャリア

令和 7 年度長期社会体験研修報告書

研修先：株式会社ミツバ

長期社会体験研修員 上林 知広

I 研修内容

1 研修先の概要

株式会社ミツバは、1946年に創業し、来年で80周年を迎える自動車電装品の製造メーカーである。創業当時は、自転車用発電ランプの製造を行っていた。現在の主力製品は、自動車のワイパーモーターやパワーウインドウモーター、二輪車のスターターモーターなどである。「夢・挑戦・スピード」を行動理念に掲げ、グローバルに開発生産体制を展開している。

2 研修先での主な研修内容

(1) 新入社員研修【4月】（研修場所：ミツバ研修センター）

大卒新入社員を対象とした集合研修に参加した。ミツバの経営理念や業務に臨む基本姿勢について理解を深めるとともに、IE実践研修を通して改善の考え方や具体的手法、その推進プロセスを体系的に学んだ。特に、3ヶ月間の生産実習を見据え、実践的な改善活動に必要な知識と視点の習得に重点が置かれていた点が特徴的であった。この期間で「改善」が企業活動の根幹を成す重要な概念であることを強く認識した。

(2) 生産実習【7月】（研修場所：新里工場製造5課）

新里工場において1ヶ月間の生産実習を行い、パワーウインドウモーターの製造業務に従事した。生徒が就職後に担う業務の一端を実際に体験することで、工場内の職場環境の整備や安全管理の徹底がいかに重視されているかを実感する機会となった。特に、作業への安全配慮が細部にまで行き届いている点や、効率化と安全性を両立させるための「からくり機構」の工夫など、現場に根差した具体的な取組を学ぶことができた。本実習は、製造現場における安全意識と改善の重要性を深く理解する貴重な経験となった。

(3) 製造技術実習【12月】（研修場所：新里工場製造技術課）

新里工場製造技術課において1ヶ月間の製造技術実習を行い、生産ラインの移管や試作検討、生産ロボットの製作などに携わった。特に、生産ロボットの製作では仕様検討から部品配置、組立まで関わり、実践的な技術力の重要性を実感した。本経験を通して、生徒の技術力向上を支えるためには、自身の専門性をさらに高める必要があると強く感じた。また、工業高校出身者が多く活躍している現場を知ることで、進路指導、職業選択する上での生徒の将来像をより具体的に描くことができた。

3 キャリア教育実践

(1) キャリア教育について

変化の激しい現代社会では、困難に直面しても粘り強く取り組み、失敗から学び続ける力が求められる。そこで、企業で実践されているものづくりの体験学習を取り入れ、自身の強みや課題を認識し、将来の進路や職業選択に生かす視点を育成することを目指した。特に、キャリア教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」のうち「自己管理能力」の向上に重点を置いた。

(2) 実践の概要（県立前橋工業高等学校）

授業実践

題材名 「変化を前向きにとらえる“挑戦の姿勢”が未来をつかむ」（ホームルーム活動）

対象 電子機械科第2学年 39名

生徒は銅線曲げやクリップ製作を通して、繰り返し改善を行い、生産性向上の過程を体験的に学習した。活動では、I Eの視点（へらす・やめる・変える）を意識することで、動作や工程を客観的に捉える力を養った。材料変更や役割交替、工程追加といったイレギュラーオペレーションを授業の中に取り入れ、予期せぬ変化に直面する状況を意図的に設定した。これにより、戸惑いや焦りといった感情を体験し、変化に対応する姿勢と品質を維持する責任の重要性を実感できた。終末では振り返りを行い、自身の行動や思考、感情の動きを整理した。その過程で、課題に応じて行動を調整する必要性に気付くことができた。これらの学習を通して、感情をコントロールしながら適切な行動選択を行う「自己管理能力」の育成へとつなげる結果となった。

II 研修成果

1 工場での研修について

研修員という立場で、多くの工業高校卒業生が就職する製造業の現場を実際に体験できたことは大きな成果であった。製造技術研修では、在学中に学んだ知識や技能が現場でどのように活かされているのかを具体的に理解することができた。さらに、加工技術や制御プログラムについても学ぶ機会が得られ、製造業で求められる最新の知識・技術を把握することができた。これらの経験を通して、生徒が将来現場で活躍できるよう技術力を高める必要性を強く感じるとともに、そのためには教員である自身の専門性を一層向上させなければならないと自覚した。

2 学校組織の活性化について

企業では、週1回以上の定例ミーティングやメールの活用により、情報共有が徹底されていた。さらに、部下の意見を積極的に吸い上げ、それを改善活動に反映させる仕組みが整えられていた。組織全体で方向性を確認しながら業務を推進する体制が確立されており、組織の活性化には「報告・連絡・相談」の徹底と現場の声を生かす風通しのよい組織づくりが不可欠であることを実感した。今後は、校内においても情報共有の在り方を見直し、協力的な体制づくりを進めたい。

3 技能五輪実習について

技能五輪実習への参加を通して、技能伝承の意義の大きさを強く感じた。高度な技能は一朝一夕に身に付くものではなく、同じ作業を繰り返す地道な鍛錬によって培われるものであり、その過程では集中力や洞察力、体力などの総合的な力も求められる。また、指導者は解決策をすぐに示すのではなく、選手自身に課題を考えさせる指導を行っていた。主体性と自ら取り組む力を育てている点が印象的であった。この経験を今後の授業に生かし、生徒が主体的に課題を考え、知識や技術力を高められる指導を行っていききたい。

III まとめ

本研修を通して、企業が求める人材像や育成の在り方、最先端の製造技術について実践的に学ぶことができた。特に、コミュニケーション力や学び続ける意欲、変化を前向きに捉え挑戦し続ける姿勢の重要性を強く理解した。また、組織として情報共有を徹底し、改善を積み重ねていく企業の姿勢から、多くの示唆を得た。さらに、採用活動や人材育成の現場を経験したことで、学校教育と社会との接続を具体的に捉える視点が養われた。これにより、進路指導においても、より現実的で説得力のある助言が可能になった。

今後は、本研修で得た知見を教科指導や学校運営にも還元し、組織の一員として主体的に改善に取り組んでいきたい。そして、生徒が社会の変化に柔軟に対応しながら、自らの可能性に挑戦できる力を育成していく。

(担当指導主事 三田村 悟)